

Title	エッセー : あたたかい心の資本 : ソーシャル・ キャピタル創出の根源
Author(s)	濱田, 陽
Citation	宗教と社会貢献. 3(1) p75-p.80
Issue Date	2013-04
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24488
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

エッセー：あたたかい心の資本 —ソーシャル・キャピタル創出の根源—

濱田 陽*

Warm Heart as ‘Capital’ The Root of Producing Social Capital

HAMADA Yo

1. 生きているソーシャル・キャピタル

人間は弱い。誠実に生きようとしても、ときに人生に翻弄され、その荒波をなんとか渡っていくことができる程度であるかもしれない。難破してしまうこともある。それは、無宗教の人であっても、なんらかの宗教を信じている人であっても、大した違いはないようにも思われる。

そういう人間どうしが、いかに信頼を、ネットワークを、規範を築くことができるだろうか。そして、その信頼、ネットワーク、規範が確かな元手となり、人間生活のさまざまな面が豊かになるということが、いかにして可能だろうか。また、その信頼、ネットワーク、規範が、いかにして、より大きく強固な信頼、ネットワーク、規範となることができるだろうか。

元手としての信頼、規範、ネットワークの総体を、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）と呼ぶならば、いかにしてそれを準備し、保証することができるだろうか。

その元手は、人間と人間の関係からつくられるが、創出の担い手である人間自身が、きわめて脆い^{もろ}存在であることは否定できない。そのような脆い人間どうし^{もろ}の関係から、いかにしてソーシャル・キャピタルが創出されるのだろうか。ソーシャル・キャピタルは、人間社会の様々な領域で今も生み出され続けているのだが、その生きた姿をとらえることは容易ではな

* 帝京大学文学部日本文化学科・准教授・yo_hamada@hotmail.com

い。マルクスは生体細胞のようなものとしての資本を分析しようとして、抽象力を駆使し、あの『資本論』の隘路にはまり込んでいった。生きているソーシャル・キャピタル⁽¹⁾をとらえるということは、そのように、とんでもなく困難な歩みであるかもしれない。

むろん、ロバート・D・パットナムの浩瀚^{こうかん}な研究がある。人と人の関係性を、出会いや交流の頻度などに着目して数量的に扱えるようにし、時代による度合いの変化を描き出すことに成功している。少なくとも、アメリカ国内では……。

たしかに、人間の社会関係そのものが、豊かな生活を実現するためのいま一つの重要な資本であるという認識には、心動かされるものがある。しかもそれが、数量的に扱うことができ、時代や地域による差異を分析できるとあらば。

そう、少なからぬ研究者や政策担当者が、このソーシャル・キャピタル論の呼びかけに心を動かされた。あるいは、ソーシャル・キャピタルという言葉のもつ響きに、自らの希望を寄せようとしてきている。カネ、モノ、個としてのヒトだけを資本とみなす発想に倦み疲れ、人と人の関係性に着目したのだ。このソーシャル・キャピタルが豊かにあれば、カネ、モノ、ヒトの資本も豊かになることがある。人と人の信頼関係に基礎を置いたネットワークと規範があつてこそ、これらが生かされる。こういう主張は、まっとうなものではないだろうか。

ただ、私には、ソーシャル・キャピタル研究をさらに一段深めるためには、数量化された後の統計的に分析しうるアプローチだけでなく、まさにソーシャル・キャピタルが生み出されるその生体細胞のようなあり方そのものに正面から向きあうアプローチが欠かせないように思われる。なぜなら、ソーシャル・キャピタル論に関心を寄せる研究者と政策担当者は、人と人の信頼関係に基礎を置いたネットワークと規範の可能性を信じようとしてきているからだ。

たしかに、ソーシャル・キャピタルの価値は、他の資本価値に変換して測ることが、ある程度までは可能である。たとえば、信頼にもとづく社会関係が成立している居住区では、お互い顔見知りであるため、余計なセキュリティ・システム導入に多大なコストをかける必要はない。社会関係が

希薄な居住区で必要となるセキュリティ・システムのコストと比較すれば、金融資本に換算したソーシャル・キャピタルの価値を示すことができる。

しかし、では、いかにしてソーシャル・キャピタルを「生み」「増やす」ことができるだろうか。それは、お金を生み、増やすように、生み、増やすことが可能だろうか。人と人の関係性をどのように創出し、強めることができるだろうか。

2. ソーシャル・キャピタルの内実

おそらく、その創出、強化は、数量的アプローチだけでは、不可能とはいわないまでもきわめて不十分ではないだろうか。信頼そのものを、数量的分析の結果を認知することによって増やすことは、ほとんどできないだろう。ネットワーク、あるいは、人と人が顔を合わせる頻度は、人々が出会う機会を意識的に設けることで増やすことが可能である。そのためには、数量的アプローチによる現状把握が意味をもつ。しかし、どのような出会いの場がいま、この場所で求められているかを、機械的に導き出すことはできない。現場では、多様な人々のこころのひだにふれるような、繊細なアプローチが必要であるし、十分な経験をもって試みてみても、それに成功するとは限らない。

叢書：宗教とソーシャル・キャピタルと宗教（全4巻、明石書店）の第1巻『アジアの宗教とソーシャル・キャピタル』（櫻井義秀・濱田陽編、2012）は、ソーシャル・キャピタルという視点によるアプローチがはらむ困難を、その可能性をもふくめて、生々しく見せている。それは、この書がアジアの宗教を論じているためである。この書に所収の多くの事例研究は、ソーシャル・キャピタルという概念をそのまま単純にアジアの宗教事例に適用しようとしたものとはなっていない。

むしろ、アジアの宗教に見られる、人と人の信頼関係に基礎を置いたネットワークと規範の可能性と限界を、ソーシャル・キャピタル論を意識、参照、対置することで、クローズアップする結果となっている。そこから、アジアの宗教についての理解、及び、ソーシャル・キャピタル論についての洞察を、同時に深めることが可能である。

アジアの宗教を対象とする事例研究のなかでも、人と人の関係性に着目した論考が一堂にそろっていることに注目したい。そして、ここから、ソーシャル・キャピタルと総称される人と人の関係性をもつ豊かさの眩いばかりの多様性や、それらがまさに創出されようとする現場の原初的な局面にも、立ち会うことができる。

おそらくソーシャル・キャピタルそのものにおいて本質的なのは、人と人が出会う回数などの量的側面よりも、むしろその出会いが、より多くの人の幸福につながるか否かという質的側面ではないだろうか。こうした問題意識は、ソーシャル・キャピタル概念の適用、という方法論を問う前に、何をより重要なソーシャル・キャピタルと考えるべきか、というコンセプト論の必要性を浮かび上がらせるだろう。

ここをあいまいにしてしまうと、ソーシャル・キャピタル論に有益な示唆を与え合える宗教研究は、成り立たないのではなかろうか。すなわち、各宗教の多様な事例において、もっぱら人と人のいかなる関係に着目するのか、という問題意識が試されてくる。

パットナムの『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』(柴内康文訳、柏書房、2006)は、第二次世界大戦中の米国社会のほうが、今日の米国社会よりもソーシャル・キャピタルが急激に強められ、また豊かだった、という一見意外に思われる事実をも明らかにしている。その間、日米は互いを敵味方として戦っていた。このように、米国内だけにソーシャル・キャピタルを限る議論を、トランスナショナルに国境を越える性質を多く有する宗教に応用するには、本質的な困難がともなう。では、宗教において、ソーシャル・キャピタルを問うことには意味がないのか。いや、ある。宗教的契機に起因する、宗教や宗教文化に関わるいかなる人間関係を、重要なソーシャル・キャピタルととらえるべきか、その本質的問いに向き合うことができるからである。

3. あたたかい心の資本

宗教はきわめて多様であり、伝統宗教は、近代の国民国家や市民社会よりはるかに長い射程において存続してきた。とはいえ、それらも、近代化

の過程で確実に変容したところもあり、また、近代化以降に生まれた新宗教も数多く存在する。したがって、宗教そのものも、静態的にとらえることはできない。

つまり、宗教にせよ、国家や市民社会にせよ、弱さを抱えた人間どうしが、関係性を結び、そのことで、少しでも弱さを乗り越え、新たな人々との関係性を結ぶことにつながったり、幸福に貢献したりすることができるかどうか問われている。そのために、いかなる人間関係にソーシャル・キャピタル研究を適用し、分析し、どのような知見を得るべきかが、問われ続けるだろう。

たとえ、「頻度」や「量」は多くとも、他者への暴力を容認・誘発してしまうようなソーシャル・キャピタルは、非暴力や幸福を導く人間関係よりも尊いとはいえない、と考えるべきではないか。

非暴力や幸福を導くソーシャル・キャピタルが求められている。それには、新たに出会う他者へのあたたかい心が不可欠であろう。試みにそれを「あたたかい心の資本」と呼んでみよう。仏陀、孔子、イエスなどは、このような資本の先覚者であったとはいえないだろうか。そして、彼らは、やはり、「量」よりも「質」にこだわったのである。いや、正確には、「質」がともなえば、そのインパクトは多くの実りをもたらし、いずれは「量」の効果をもつだろうと考えたのだ。

人間が人間の力だけで、既知の、さらには新たに出会う他者へのあたたかい心を育むことは容易ではない。そのことに、彼らは気づいていたのではないだろうか。むしろ、人間関係の限界や葛藤をいかに乗り越えるかが、仏教、儒教、キリスト教などの成立の、起点における課題だったのではないか。また、今日、広く宗教の名で呼ばれるソーシャル・ネットワークに共通する課題であるのではないだろうか。

その課題を忘却すれば、どの宗教にせよ、あるいは国家や市民社会にせよ、他者を抑圧するものに容易に転じうるだろう。「あたたかい心の資本」としての慈悲、仁、愛。いかなる言葉で呼ぼうと、それは、人間関係の限界や葛藤を乗り越え、人と人の新たな信頼関係を築き、元手となって、さまざまなネットワーク、規範を創出し、より多くの人々の幸福につながるソーシャル・キャピタルを生み出す、さらに原初的で本来的な「資本」なのではないだろうか。

宗教研究は、ソーシャル・キャピタル創出の根源を問わなければならないと私は考える。

註

- (1) ハーバード大学医学部医療政策学科の医療社会学教授ニコラス・クリスタキスは、ソーシャル・ネットワークをソーシャル・キャピタルとしてのみならず、生きもの (*living things*) としてとらえる視点を提起することで、時系列的な変化を分析し、新型インフルエンザ予防など社会的に有用な、斬新な研究成果を挙げてきている。